

## インド中観派と瑜伽行唯識派 —その異同と背景を再考する—

斎藤明

国際仏教大学院大学

義浄(635-713)が伝えるように、七世紀後半におけるインドの大乗仏教は「二種に過ぎない。一には則ち中観、二には乃ち瑜伽」(『南海寄帰内法伝』)の二つの学派からなることが広く認識されていた。義浄はまた、これら二学派の教理上の特色を「中観は則ち俗有真空・体虚如幻であり、瑜伽は則ち外無内有・事皆唯識である」と簡潔に描き出す。

これとともに「大乘」仏教に関する義浄の記述で見のがせないのは、「その[上座部、大衆部、根本説一切有部、正量部の]四部の中で大乘と小乗は区分定まらず。」の一文と、「[小乗と大乘はともに]律[蔵による]檢[校]は殊ならず、[波羅夷・僧残等の]五篇<sup>びん</sup>を制し、通じて四諦を修めるが、もしも菩薩を礼し、大乘経を読むなら、之を名づけて大[乗]となす。」という当時の大乘仏教の特色づけである。

以上の義浄の指摘は、インドにおける大乘仏教の特色とともに、いわゆる「中観派」と「瑜伽行[唯識]派」と呼ばれる両学派の思想的な相違を理解するうえで重要である。これを踏まえたうえで、本発表では、(1)初期の八千頌系の『般若経』の空思想に対する「空イコール非存在」という誤解を、主に哲学的意味論の視点から正し、空を不生不滅の縁起に等値されるとしたナーガールジュナ(150-250頃)の仏教思想史上の役割、(2)『般若経』の無自性(=自性空)の説を未了義とし、主に認識論的な観点から了義としての三自性説(=三性説)を意味づけた初期瑜伽行派の学説の登場、そして(3)その瑜伽行派の三性説を、勝義(最高の真実)と世俗(=言語習慣)の二真理(二諦)説の観点から、意味論的、認識論的、ならびに修道論的な文脈から批判を加え、名実ともに中観派を基礎づけたバーヴィヴェーカ(490-570頃)の思想史上の役割を再考したい。